

琉球陶器荒焼甕の編年研究

宮城弘樹

Chronological Study of the Ryūkyū Stoneware Arayachi Jars

MIYAGI, Hiroki

要 旨

近世琉球の焼物は「琉球陶器」とよばれる¹。琉球陶器は大きく施釉の上焼と無釉の荒焼に大別される。荒焼は、壺や甕あるいは挿鉢といった器種が生産された。17世紀から現代まで生産されている製品である。

しかし、その型式的推移については不明な点が多い。そこで、本論では、型式学的検討を行い、古墓出土の紀年銘資料等を用い分析し、荒焼甕を5型式に分類、4段階の編年案を提示する。

Abstract

Early Modern Period Ryūkyū ceramic is called "Ryūkyū Stoneware".

Ryūkyū Stoneware can be divided between the glazed *Jōyachi* wares and the unglazed *Arayachi* ones. The *Arayachi* products include *tsubo* and *kame* jars, as well as *suribachi* grinding bowls. They are shapes that have been produced from the 17th century to nowadays.

However, there are still many unclear points concerning their typological evolution.

In this article, the chronology was considered through typological analyses and dated funerary inscriptions. The *Arayachi* Jars were distributed into five (5) types and a chronology including four (4) periods was proposed.

はじめに

筆者は古墓出土資料に関して幾つかの成果を発表してきた。その一つに、出土の紀年銘資料を集成しこれを一冊にまとめた（宮城 2021）。集成資料の中に、蔵骨器として転用された琉球陶器の荒焼甕があり、そこに記載された紀年銘資料を幾つか見出すことができた。これまで専用蔵骨器厨子の研究を主に発表してきたが、今回は転用の荒焼「甕」に焦点をしぼり、蔵骨器として利用され紀年銘資料を紹介した上で、琉球陶器荒焼甕の分類と編年的研究を行う。

1 研究略史

琉球陶器は大きく焼締の「荒焼」と施釉陶器の「上焼」に分類され、これに瓦や瓦質土器、アカムヌー（陶質土器）などを含む。壺屋は現代も窯業が連綿と営まれるが、琉球王国時代の古窯として壺屋以外にも、沖縄本島では喜名・知花・湧田・古我知など、八重山でも黒石川、平田、阿香花などで窯業があったことが考古学的にも把握されている（図1）。

考古資料として荒焼に注目した研究はそれほど多くないが器種ごとに以下の研究がある。

安里・家田・上原は挿鉢の器形をI式からIV式に分類し各窯の生産年代を比定し編年観を示している（安里ほか 1987）。

壺や瓶は、泡盛容器および酒器として用いられ、出土品に関する多くの研究がみられる。具体的には容器の移動を観察することができることから、汐留遺跡や東大構内遺跡などいわゆる江戸遺跡などで出土例があり、これらの出土品を含めた型式学的検討が行われている。特に小田静夫は汐留遺跡出土の壺屋の型式分類や理化学的方法による分析を進めるとともに、泡盛容器として壺屋が江戸遺跡や小笠原に流通していることを明らかにした（小田 1996、2008）。その後、追加資料を加え吉田健太によって泡盛容器の生産地と消費地の動向についてまとめられている（吉田 2019）。また、堀内秀樹は江戸遺跡の輸入陶磁を詳らかにする中で、壺屋の陶器についても悉皆的に資料集成している（堀内 2021）。

編年研究では、家田淳一による沖縄県下の上焼を含む窯跡資料等を用い、体系的編年を提示するが、残念ながら甕については詳細が触れられていない（家田 2000）。他方、甕を含む所見としては、琉球陶器研究をリードする新垣力によって特に初期段階の資料の抽出が行われている（新垣 2011）。本研究も新垣の分析に習うところが多い。また、田畑直彦により壺甕の大型容器の製作技法に着目した研究などは技術の史的展開を理解する上で新たな視点を与えている（田畑 2017）。

一方で、荒焼甕と同じ窯での生産品でありながら、消費地が墓にほぼ限られることから、厨子甕の研究と横断するような比較研究には乏しい。専用蔵骨器「厨子」にも荒焼に分類されるものがあって、厨子甕の編年研究は相対的に目の細かい分類案が示されている。厨子は甕形と御殿形に分類されるが、前者は安里進によってボージャー、マンガン掛けの両形式ともに細分編年が提示されている（安里 2006,1997）。後者の御殿形は拙稿にて、赤焼と荒焼（マンガン掛け）の2

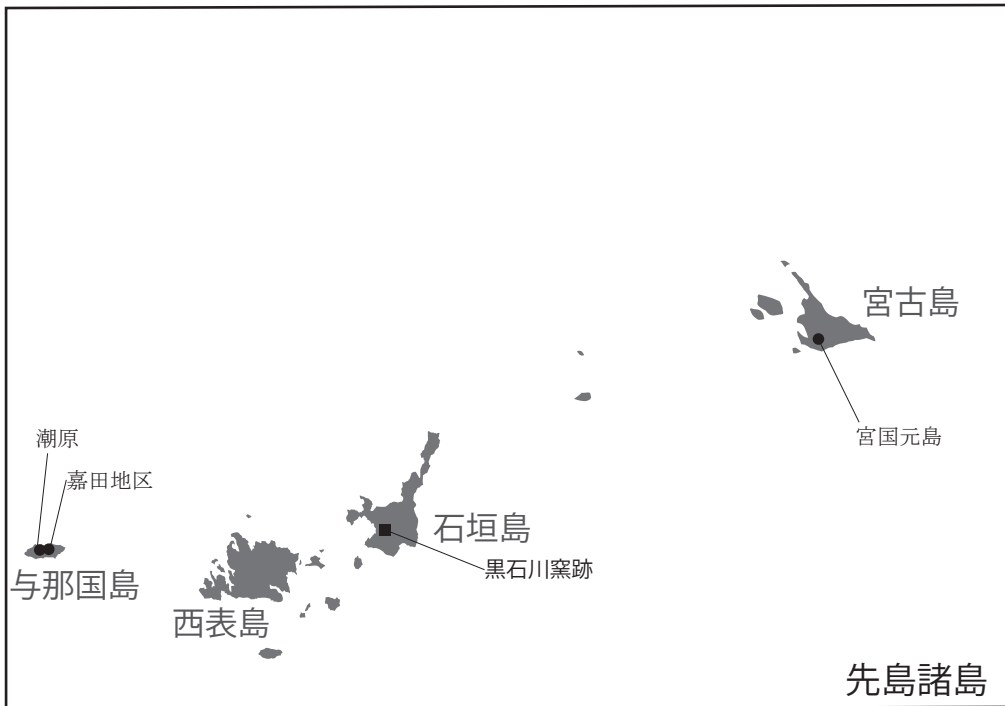
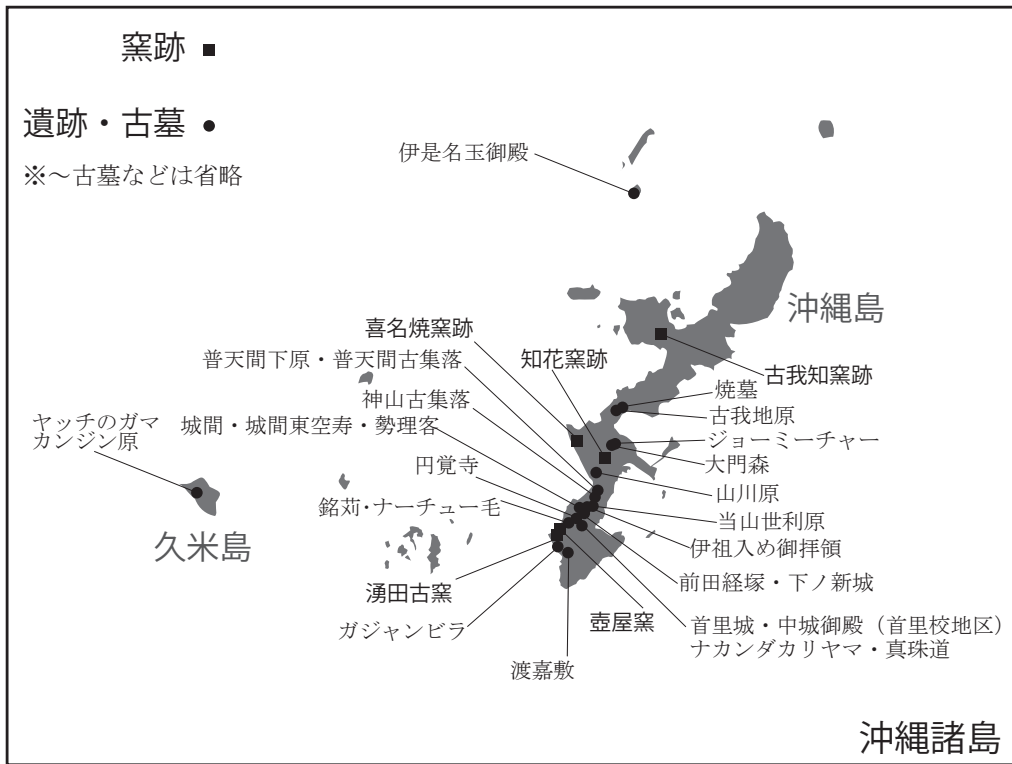


図1 本論で扱う主な遺跡等位置図

形式の編年を提示した（宮城 2020ab）。

琉球陶器の研究は、これまで美術史や窯業技術分野における研究が先行し、鑑賞の対象として〇〇焼などと窯を特定させる作業が優先させる傾向にあったが、近年では王国時代の遺跡調査出土品としても多数報告され、考古学的研究にも一定の蓄積が認められる。本研究の現時点における評価は、池田榮史が「今後は初期無釉陶器から現在の荒焼に至るまでの推移過程を焼成した窯構造の変化や製品の型式学的編年によって序列化することが必要である（池田 2018）」としており、編年研究の必要性を指摘する。

本論では主として古墓出土荒焼のうち「甕」あるいは「水甕」と呼称される資料の編年について考察する²。対象資料は、蔵骨器として転用された甕のうち紀年銘が記されたもの。全形を窺うことのできる紀年銘の無い甕、および参考資料として窯跡出土資料のものや伝世品も含めて属性分析を行う。具体的には、①属性分析による考察。②紀年銘資料による年代比定。③窯跡資料との比較の手順で計画した。

なお、集成は古墓出土資料について悉皆的に行ったが、それ以外の集落遺跡や生産遺跡、博物館等に保管される伝世資料は図録掲載や筆者の管見の限り抽出しており、今後補う必要があることを付言しておく。

2. 対象資料と分析方法

古墓出土資料を中心に、①器形の全体が窺える甕（n=97、付表）の型式学的検討として属性分析を行う。続いて、①の中から②紀年銘のある転用蔵骨器の甕（n=10、表3）を用い、窯跡の年代や既往の編年観とあわせ、その年代的考察を試みる。

これまでに甕に関する編年研究が必要であると前項において研究史を概括したが、新垣力およびこれを引用する田畑直彦の整理がある（田畑 2017）。ここでは初出の新垣の甕について言及した部分を中心に抜粋する（新垣 2011）。

荒焼は窯を時系列で並べると、①湧田初期、②湧田警察棟・喜名・知花、③壺屋、黒石川の順番になるとされる。①は「初期無釉陶器」とブルーピングし、甕は口縁部を「T」字状に成形し、肩部に縄目文をめぐらせる。内面に叩き成型時に痕跡が残り、他の窯跡の製品に比して薄く小型である。口唇部には二枚貝の目痕が残る。なお、その技術起源は薩摩伝来の文献記録の製陶技術と理解され、特に苗代川の甕や壺などの叩き成型の大型器種によくみられるとされる（渡辺 2018）。②初期無釉陶器の生産技術が在地化し、甕は①と同器形だが、喜名窯跡では口縁部は略化し、器壁も厚く大型化する。知花窯跡では、口縁部が方形に肥厚するのがみとめられるとされる。なお、壺には目痕としてサンゴ目が残るとして紹介する。③壺屋窯跡は 1682 年に湧田、宝口、知花窯が統合されて開窯したと伝えられている。甕は鏝縁のものと、肥厚口縁のものがあると紹介する。④黒石川窯跡は鏝縁口縁と逆L字状の口縁部のものを示している。

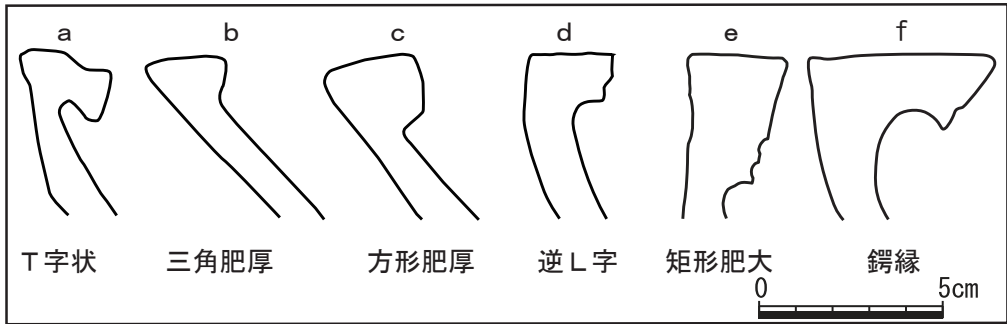


図2 口縁形態の分類

甕 1

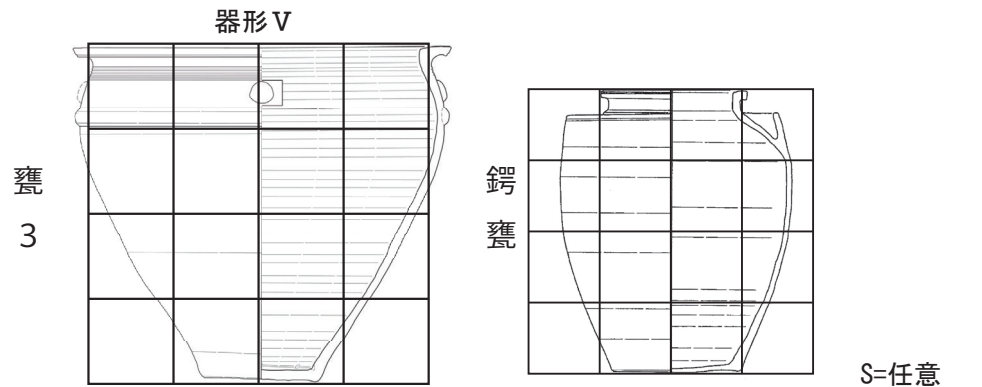
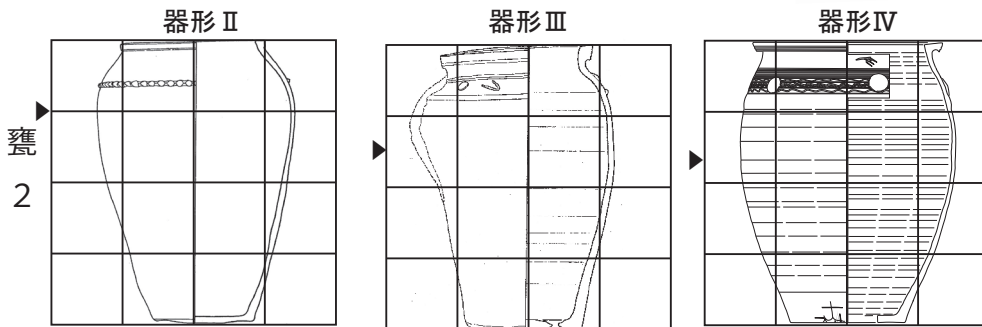
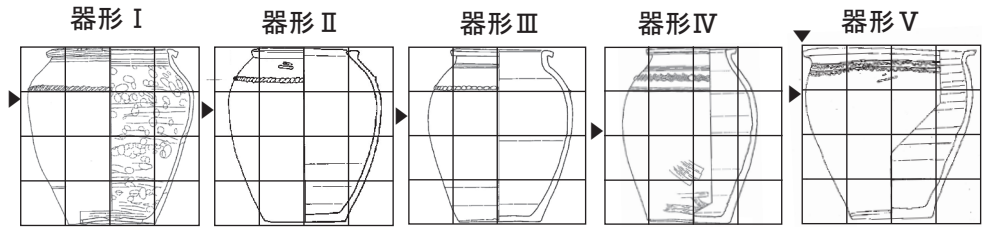


図3 器種及び器形の分類

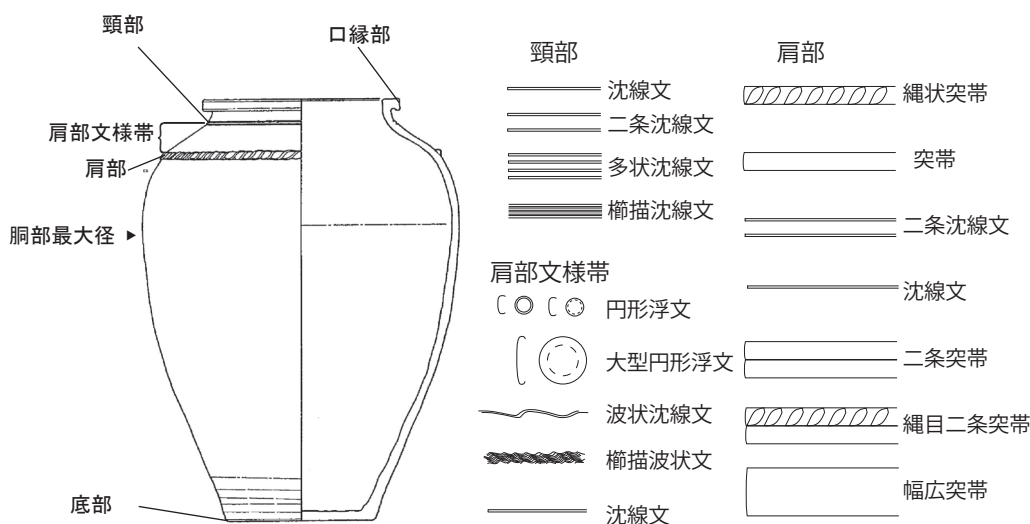


図4 部位名称と頸部・肩部・肩部文様帯の装飾属性の分類

これをやや模式的に示すと口縁部形態は、(a) T字状、(b) 三角肥厚、(c) 方形肥厚、(d) 逆L字、(e) 矩形肥大、(f) 鋸縁の6分類（呼称については便宜的なもので、本論での仮称）することが可能である（図2）。

新垣は、器形については基本的に同じとするが、本論では細分案としてⅠ～Ⅴの5種に大別した（図3）。器形Ⅰは胴部最大径がおおよそ器高を1とした場合、底部から1/4の高さに肩があって、やや高い位置で肩の張る器形で頸の無いもの。器形ⅡはⅠに比して胴部最大径がやや下がり、無頸のもの。器形Ⅲは、器形Ⅱと類似するが相対的に頸が明瞭なもの。器形Ⅳは胴部に張りがあり、加えて最大径はⅡ・Ⅲに比してさらに下がり、頸部の屈曲は明瞭ではないもの。器形Ⅴは器高と口径がほぼ同じサイズで全体的に口径の大きいもの。

また、サイズから甕1～3、罇甕の4分類し整理した（図3）。甕1は高さ30～45cmで底部と口径がほぼ同じサイズで胴最大径が上半にある。ハンドゥーなどと呼称される。なお、一部胴最大径がやや小さく長胴になる資料は甕とするべきか壺とするべきか曖昧なものもあるが、本論で行う属性分析に資すると考え有文のものは今回甕として分類している。甕2は器高が45～70cmと大型の器で底径よりも口径が広がるのが一般的である。報告書や図録にはこれを水甕とするものも多く見られる。甕3の資料数は少ないが、いずれも首里城や円覚寺で埋甕として使用されていたもので、器高・口径ともに80cmを超える大型の器である。これも埋甕、大甕などと呼称される。甕1は38点、甕2は51点、甕3は2点を報告書等から抽出し、サイズと属性分類を表に示した（付表1）。罇甕は伝世品に類例を確認することができたものの、出土する完形資料は1例のみであった。

上記の器種、器形の分類とあわせて、肩部装飾を、頸部文様、肩部文様帯、肩部文様のそれぞれの属性を抽出し（図4）、組み合わせから、「い」～「の」までの26種に分類を行った（図5）。

肩部区画文		頸部 区画	肩部文様帯	分類	模式図	罫1	罫2	罫3	
有文	突帯	一条	縄目状突帯	無	無文	い		5	12
				有	無文	ろ		6	6
					(頸部波状沈線) 無文	は		1	
					波状文	に		1	
					円形浮文	ほ		2	2
		突帯	有	沈線文+円形浮文	へ		1	2	
				波状櫛描文+円形浮文	と			1	
				円形浮文	ち		5	5	
		幅広突帯	無	円形浮文	り				1
			有	波状文+円形浮文	ぬ		1	10	
				円形浮文	る			1	1
		二条	縄目状突帯+突帯	有	波状文+円形浮文	を			1
	無			無文	わ			2	
	突帯×2条		有	沈線文+円形浮文	か			1	
			有	円形浮文	よ			4	
	沈線	一条	沈線	無	無文	た		2	
				有	無文	れ		1	
					波状文	そ			1
					沈線文+円形浮文	つ		1	
					波状櫛描文+円形浮文	ね		3	
					円形浮文	な		5	1
		二条	二条沈線	無	無文	ら		2	1
			二条沈線+円形浮文	無	無文	む			1
				有	無文	う		1	
無し				沈線文+波状沈線文	み		1		
無文			有		の			1	

図5 肩部装飾の分類

以下、代表的な資料を図6～8に示す（出典文献については、付表参考文献参照）。

1は、ナカダカリヤマ古墓群第14号墓墓室出土の甕1である。口縁はT字状(a)で、胴の高い位置で最大径となり、肩部には縄目状突帯を貼り付ける。近年これを初期無釉陶器としてまとめられている³（沖縄県埋文2010:240）。

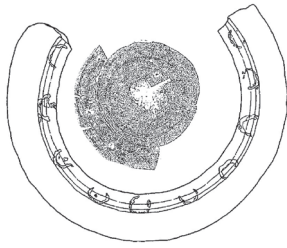
2は、銘苅古墓群南地区C-4号墓墓室より出土する。外面に泥釉、肩部文様帯は無文だが窯印が認められる。器形は無頸の甕1で、胴最大径はナカダカリヤマ古墓群の資料に比してやや下がるが、突帯は胴部最大径よりやや上部となり縄目状突帯を貼り付ける。口縁は三角肥厚(b)となる。1・2ともに、肩部文様帯は無文となる。3は甕2、勢理客門原古墓群16号墓の墓室から出土、肩部に縄状突帯を貼り付け、口縁直下頸部に二条の沈線を施す。参考になる資料として、専用蔵骨器であるポージャー厨子の初期型式の例を示す。口縁形態がこれと類似する⁴（図7-13）。

4・5・6は逆L字状口縁(d)。4は銘苅古墓群B地区43号墓出土、肩部の区画文は突帯を貼り付け、円形浮文が7個貼り付けられている。本資料は銘書があり乾隆33（1768）、同35（1770）、同39（1774）年紀年銘が確認される。5も紀年銘を有する逆L字状口縁(d)の甕2で、前者は肩部に区画文が無く頸部に沈線が施される。ナーチュー毛古墓群24号墓出土資料(No.19)で、康熙35年（1696）の紀年銘を有する。6はカンジン原古墓群6号墓(No.19)で肩部に縄目状突帯、頸部に文様は認められない。乾隆16年（1751）の紀年銘を有する。

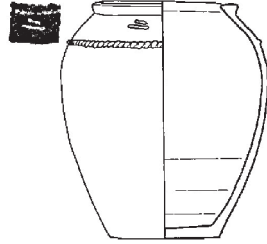
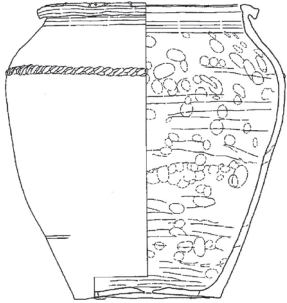
7・8は前田・経塚近世墓群出土資料でいずれも矩形肥大(e)の甕2。前者は前田真知堂B丘陵29号墓出土資料資料（蔵骨器11）で、肩部に突帯、頸部に多条沈線、肩部文様帯には沈線文上に円形浮文を付す。本資料にはマンガン掛け厨子甕の蓋が伴い、蓋内に光緒13年（1887）の死去年が記載される（洗骨年は不知）。後者は経塚下平良大名原A丘陵1号墓出土8号蔵骨器、幅広の突帯を肩部の区画とし、頸部は多条沈線、肩部文様帯には櫛描波状沈線文の上に、大型の円形浮文を貼り付ける。なお、類似する矩形肥大はマンガン掛け厨子甕にも認められる。例として、銘苅古墓群E-13出土のマンガン掛け厨子甕を図示した（図7-14）。なお、本資料は夭折した子二人の死去洗骨年が記載される。男児は死去年咸豊10年（1860）で同治2年（1863）洗骨、女児は死去年光緒元年（1875）で光緒2年（1876）洗骨が記載される。安里進（安里1997）の編年観を参考に示すと、本資料はIV式段階（1850年代～1890年代）に比定される。

9・10は罌縁(f)の資料で、前者は前田・経塚近世墓群経塚南小島原A丘陵1号墓蔵骨器2の甕1で、肩部に二条沈線、頸部に多条沈線、肩部文様帯は櫛描文に円形浮文を4つ貼り付ける。後者は甕2で神山古集落のC地区SK040出土資料で、肩部は幅広突帯、頸部は多条沈線、肩部文様帯には沈線で区画した中に櫛描沈線文を施す。報告者はこれを沖縄戦時日本軍によって構築された壕と推定する。よって沖縄戦時の昭和20年（1945）年頃の埋没と考えられる。

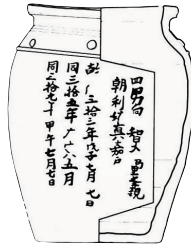
11は銘苅古墓群A地区12号墓出土資料で甕2と目される。宣統2年（1910）の銘書を有する。口縁はやや短い罌縁で、肩部に二条沈線、頸部に多条沈線を廻らせ肩部文様帯に波状沈線文を施す。



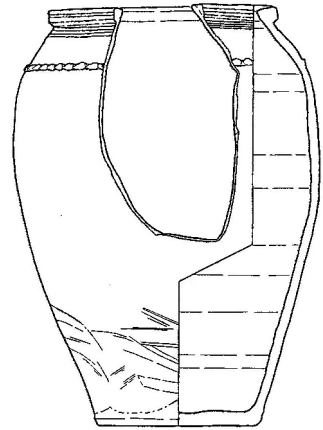
1 ナカダカリヤマ古墓群 (甕 1・1 式)



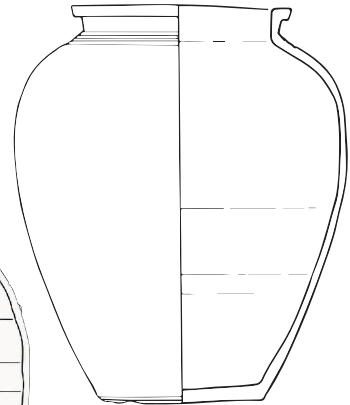
2 銘苅古墓群 (甕 1・2 式)



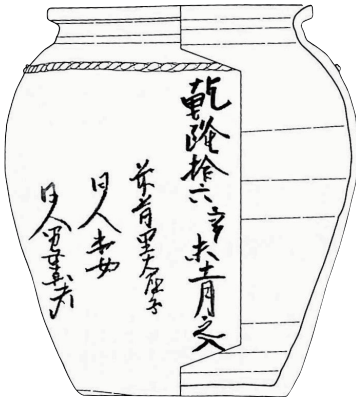
4 銘苅古墓群 (甕 1・3 式)
[1768・1770・1774]



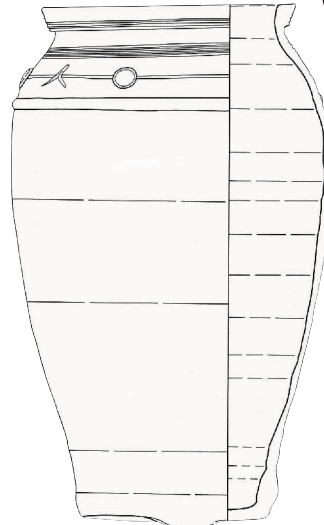
3 勢理客城門原古墓群 (甕 2・2 式)



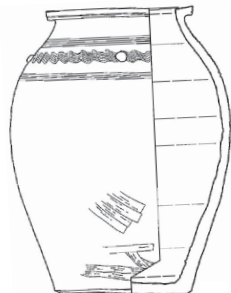
5 ナーチュ毛古墓群 (甕 2・2 式)
[1696]



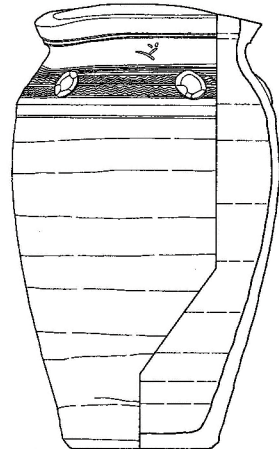
6 カンジン原古墓群 (甕 2・2 式)
[1751]



7 前田経塚近世墓群 (甕 2・3 式)
[1887]



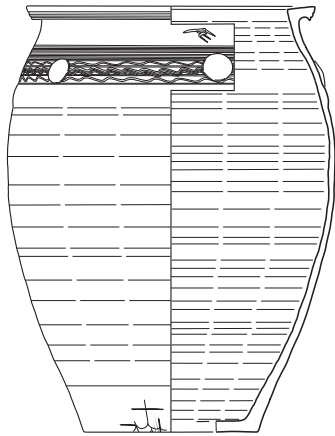
9 前田経塚近世墓群
(甕 1・4 式)



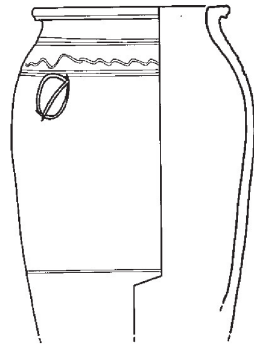
8 前田経塚近世墓群
(甕 2・4-5 式)

0 20cm
S=1/10

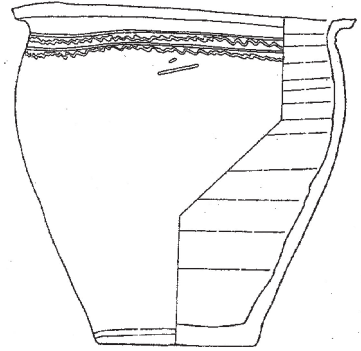
図6 遺跡出土の甕・水甕 (1)



10 神山古集落 (甕 2・4 式)



11 銘苅古墓群 (甕 2・5 式)
[1910]



12 嘉田地区 (甕 2・5 式)

0 S=1/10 20cm

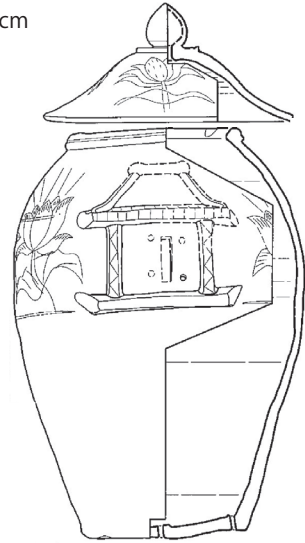
写真 = 任意



15 大松蒲 (甕 2・2 式)
[1770]



16 大松蒲 (甕 2・3 式)
[1842]



13 銘苅原古墓群 (参考資料)
[1680]

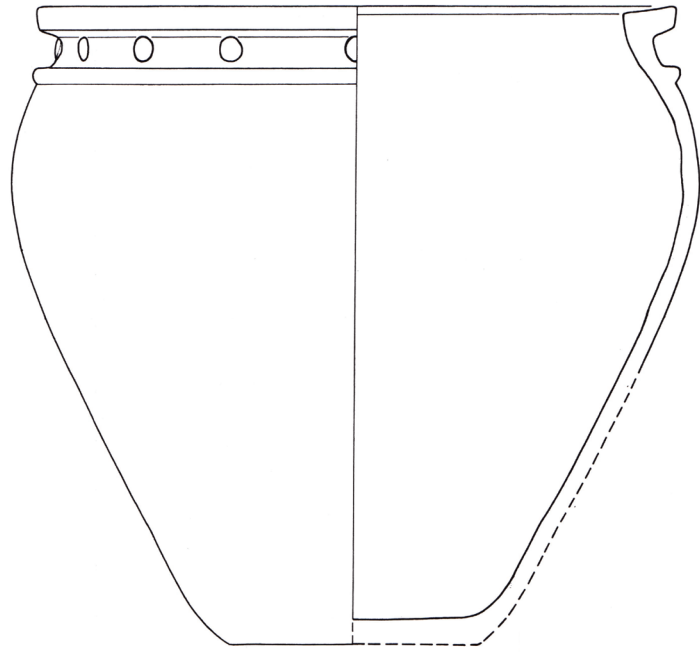


17 伊是名玉御殿
西室 (甕 2・2 式)
[1870]

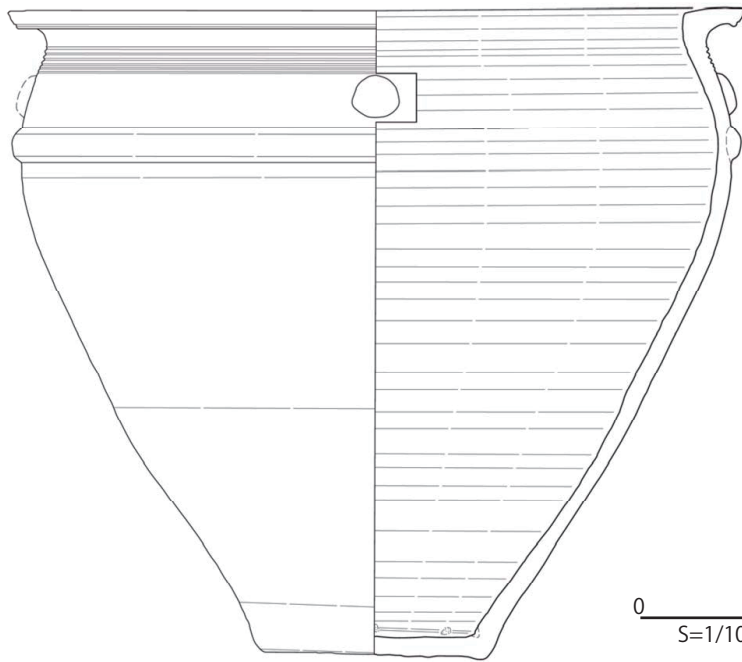


14 銘苅原古墓群
[1860-76 年]

図 7 遺跡出土の甕・水甕 (2) ・参考資料



18 円覚寺 (甕 3・3 式)



19 首里城奉神門 (甕 3・4 式)

図 8 遺跡出土の大甕

12は器形Vの甕1で、嘉田地区11号墓より出土する。口縁下の肩部文様帯に沈線、波状沈線を交互に施す。いわゆる八重山焼と推測される。

18・19は鈔縁口縁の甕3で、前者は円覚寺、後者は首里城奉神門より出土。いずれも埋甕として検出されている。前者は肩部に突帯、肩部文様帯に円形浮文を貼り付ける。後者は肩部に幅広突帯文、頸部に多条沈線文、肩部文様帯には円形浮文を貼り付ける。

3. 属性の分類と相関関係

今回使用する属性は、先に分類を示したとおり、器種を4種（但し、鈔甕は事例に乏しいため型式学的検討からは除く）、器形を5種、口縁形態を6種、肩部装飾を26種に分類した。器種ごとに、器形と口縁形態の相関、器形×口縁形態と肩部装飾との相関をみていくとそれぞれ以下のようにまとめられる。

器形と口縁形態(表1)で相関を示すのは、甕1ではI a、II b、II d、III d、IV d、V f（6種）。甕2ではII bc、II d、II ef、III b、III e、III f、IV ef、V f（8種）。甕3はV f（1種）となる。

次にこれをI a～V f（15種）に分類し、肩部および肩部文様帯の装飾との相関をみていく(表2)。甕1から順に見ていく。肩部に縄目状突帯を付すのはI aからIII d、続いて突帯や沈線がIII dからIV fにみられる。幅広突帯はIV fとのみ相関する。甕2は甕1に比して大型であることなどからか、縄目状突帯はIII eまでみられる。二条突帯は甕1には無いが、甕2でほぼ独占する。幅広突帯もIII f、IV efが優勢ながら、II efやIII eにも見られ大きさと相関するものと考えられる。甕3はV fのみで確認されるもので幅広突帯が付され、円形浮文(肩部装飾分類：ほ～を・つ～な・む・う)には大小あるが、径の小さいものから大きな浮文の推移が推測される。また、櫛描沈線文(肩部装飾分類：ち・ぬ・ね)についてはIII d・eから確認されV fまで施される。ただし、喜名窯跡出土品の中には甕の肩部文様帯に櫛描波状沈線文を有するものもあり櫛描文イコール新しいという単純なものではないこともまた留意する必要がある。

表1 器形と口縁形態の相関

甕1	I	II	III	IV	V
a	1				
b		4			
c					
d		4	22	4	
e					
f					1

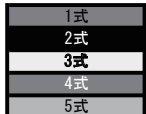
甕2	I	II	III	IV	V
a					
b		3	9		
c		5			
d		3			
e		2	18	1	
f		1	5	5	1

甕3	I	II	III	IV	V
a					
b					
c					
d					
e					
f					2

合計	I	II	III	IV	V
a	1				
b		7	9		
c		5			
d		7	22	4	
e		2	18	1	
f		1	5	5	4

表2 器形×口縁形態と肩部裝飾との相関

肩部	器形×口縁形態								器形×口縁形態								器形×口縁形態		
	壺1	I a	II b	II d	III d	IV d	IV f	V f	壺2	II bc	II d	II ef	III b	III e	III f	IV ef	V f	壺3	V f
縄目状突帯	いろ	1	4						6	1		4	1					いろ	
	ろは			1	5				1	2		2	1					ろは	
	にほ			1														にほ	
	へとち			1	1			1					1	1				へとち	
	りぬ																	りぬ	1
幅広	る							1										る	1
	をわ											1						をわ	
	かよ										1		2		1			かよ	
二条突帯	たれ				2													たれ	
	そつ					1								1				そつ	
沈線文	ね						3											ね	
	なら				5							1						なら	
	むう				2								1					むう	
	あ				1													あ	
	の												1					の	
無文	あ																	あ	1
	の												1					の	



4. 型式分類と年代比定

相関関係をさらにまとめると、1式から5式に分類され、おおよそ1→2→3→4・5への型式変遷を追うものと仮定する。

1式は初期無釉陶器、2式はボージャー厨子に並行するタイプで突帯を施し、最大径は比較的高い位置にある頸の短い器形。3式は胴の張りがなく肩部の区画文が突帯、沈線に置き換わる段階。4式は鈔縁の口縁に幅広突帯や櫛描の波状文が占有的になる段階。なお、5式は口の開く器形で後続する可能性もあるが、資料数が少なくまた推定される年代は4式と並行するので、暫定的な区分とした。類例に乏しくやや特徴的な器形であることを考えると、生産された窯が壺屋以外の窯の可能性も想定される。

次に、これらの年代観を、紀年銘資料から考えていきたい。ただし、前提としてここには少なくとも2つの考慮すべき課題があることを指摘しておきたい。1点目に紀年銘のほとんどが墨書であり、死去年にせよ洗骨年にせよ、伝世品に記載した可能性や遡る年代を記載した可能性があって、必ずしも紀年銘イコール当該資料の製作年代と近いと断定することはできない。2点目は、そもそもたった10点の紀年銘では数量の少なさは否めない。

既に4点（4・5・6・7）の紀年銘例については紹介したとおりで、残り6点の紀年銘資料について紹介する（表3）。

図7-15・16は古堅大松浦墓の資料で、紀年銘は前者（15）が乾隆35年（1770）、後者（16）が道光22年（1842）で後者が前者に比して墓口に近いところに安置されており、配列の順番

5. 窯跡出土資料（図 11）

琉球窯業史については、文献史学や美術史および発掘調査の成果などから次のように理解されている。陶器生産については1616年に薩摩から招聘された朝鮮人陶工の技術であったとされ、彼らは湧田村で陶器生産を開始したと考えられている。湧田の発掘調査は1986年から数次にわたり実施されている。報告書が4冊ありそれぞれ荒焼が出土するが、まとまった点数が掲載される資料を図示した（報告書Ⅱ：20～22、Ⅳ23～25）。出土品には窯跡の製品も含まれると思われるが、同時に近世から近代にかけての湧田村（集落）に伴う製品も含まれると目される。

喜名窯跡は、2003年に住宅建設に伴って窯跡が発見・発掘され、『読谷村歴史民俗資料館紀要』等で継続的に報告されている（仲宗根ほか2014、2022、ほか）。報告では甕の口縁部バリエーションはもう少し多いが、三角肥厚（b）が多く出土しているように見受けられる（26～28）。

知花窯跡は、1989年に偶然窯跡が発見され小規模ながらも調査され、資料が図化報告されている（29・30）。

文献上1682年に首里王府は、工芸奨励や生産の強化を目的に各地の窯を那覇の壺屋に集めた。これが壺屋の興りとされ、以後沖縄における陶器生産の一大拠点となった。壺屋窯跡群では、幾つかの窯跡が調査されている（報告書Ⅰ：31～33、Ⅲ：34～36）。

一方、地方でも各地の需要に応じるように窯業が興っている。沖縄本島北部の古我知窯は、施釉陶器を生産する。操窯年についてははっきりとしたことはわかっていないが、窯跡出土の

播鉢の分析によれば、Ⅲ式（18世紀後半～19世紀前半）を主体にⅡ式（17世紀末～18世紀前半）が少量出土することから17世紀後半から19世紀前半におさまるものと位置付けられている（図10）。厨子甕の型式的特徴からもおよそ18世紀第3四半期を中心とする年代と目される⁶。資料について管見の限り図化資料は無く、甕の実態は不明であるが、名護博物館が収蔵する伝世資料があり、本論では図録掲載資料を参考に示した（37・38）。いずれも施釉陶器ながら、器形は荒焼甕と共通する。

八重山でも、仲村渠致元が1724年に八重山にわたり陶法を伝えたとされている。実際に彼が伝授し、陶器生産が本格的にはじまったと考えられ、石垣島では阿香花窯跡、黒石川窯跡が発見され発掘調査が行われている。黒石川は致元の陶器製作の指導を受けた者によって営まれたと考えられ、1730年に大窯

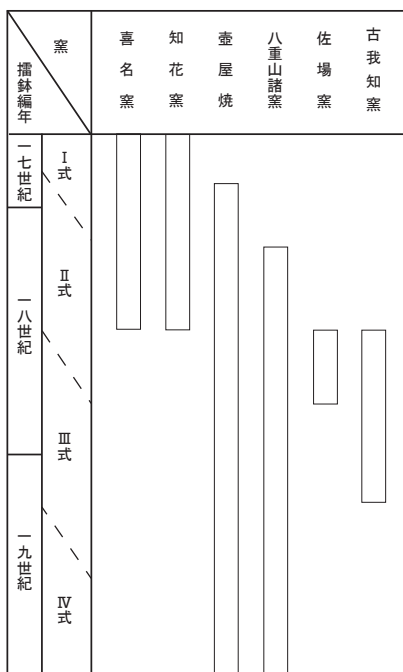


図10 播鉢の器形変化からみた沖縄古窯の編年（安里ほか1987：筆者再構成）

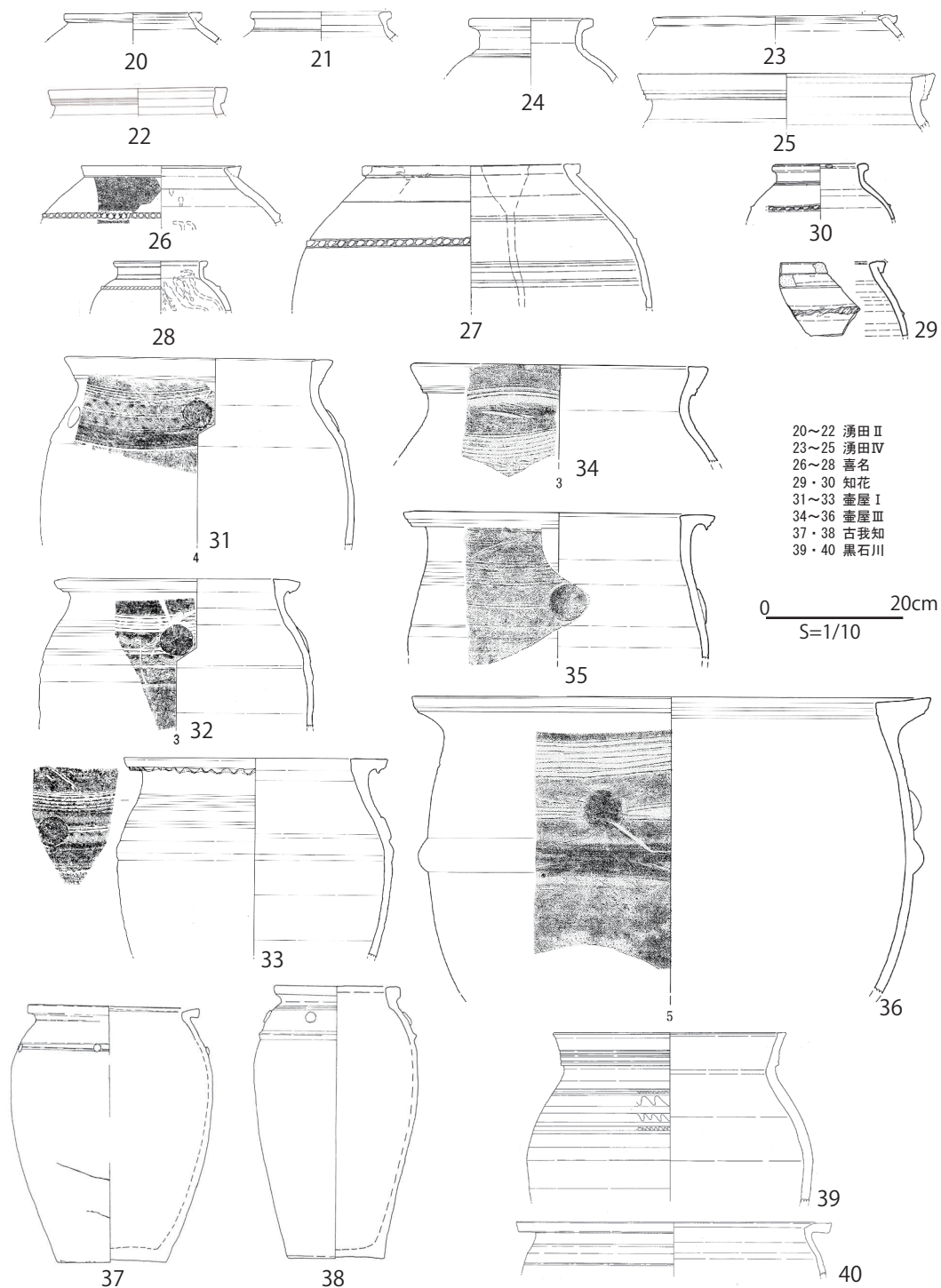


図11 窯跡出土及び博物館収蔵の主な甕・水甕

をつくったとされる。土地改良に伴い発見され、1988・89年に黒石川窯址の調査が行われている。遺跡では焼締陶器が出土する。甕は沖縄の窯跡で出土する口縁形態とはやや異なる特徴的な資料が多いものの、矩形肥大や鏝縁口縁に類する資料と判断した(39・40)。

以上、窯跡資料を管見の限りではあるが、総括すると表4のようにま

とめられる。湧田で一部T字状口縁(a)が認められるが、矩形肥大(e)までバリエーションが豊富である。喜名窯、知花窯跡でb c d、壺屋はe fとなり、古我知ではd e、黒石川ではe fが出土しており、それぞれ想定される窯の操窯年と型式はおおよそ一致している。

6. まとめ

本論では荒焼甕に焦点を絞って型式学的分析を行い、序列化を試み年代的な位置づけについて考察を行った。とは言ったものの、想定する存続年はおおよそ100年とやや冗長で、今後細分編年を目指すべきと考えている。それでも、着目すべき属性やその属性の推移についてはある程度示すことが出来たと考えている。具体的には、甕を4期区分した(図12)。1式は紀年銘資料が無いものの、これまでの研究や文献から1616年の沖縄における陶器生産の開始期に接続させ17世紀前半～後半頃。2式は転用蔵骨器としての紀年銘が1696～1789年となるので、17世紀末～18世紀後半。3式は転用蔵骨器としての紀年銘が1768～1887年となるので18世紀後半～19世紀後半。特に2式から3式が重複するのが1768～1789年となり、この年代観はおおよそボージャー厨子、マンガン掛け厨子の過渡期(上江洲1980)、あるいは評価としてはやや年代は下がるが壺屋窯跡の分析による単室登窯の窯体幅や焚き口の変化(島・仲宗根2005)もおおよそ18世紀後半の年代に近く、画期を考える上で整合的ではないかと目される。古我知窯の製品は施釉陶器だが、器形としては3式と類似点が多い。属性分析の参考として用いたが、このような視点で見ると3→4式の変化は窯業の一つの画期となった可能性を指摘しておきたい。即ち製品の変化は、窯構造の変化、あるいは地方窯の生産開始廃業などと連動する可能性を念頭に置く必要もあるのではないだろうか。3式相当と考えられる甕3などの製作も、この時期の特徴の一つとなる。4式は3式に後続すると考えられるが、属性から3-4式両者の特徴を持つものもあり、漸次的に変化していったと考えられた。円形浮文の肥大化、口縁の鏝縁化、肩の張りを失い長胴化や沈線文から櫛描沈線文を多用する傾向は、厨

表4 各窯跡発掘調査等資料と甕類各型式分類との関係

	I a	II b・c	III d	III e	IV f	V f
湧田(2)		●	●	●		
湧田(4)	●		●	●		
喜名		●	●			
知花		●	●			
壺屋1				●	●	
壺屋2				●	●	●
古我知			●	●		
黒石川				●	●	

●は図に掲載があるものを示した。(図11参照)

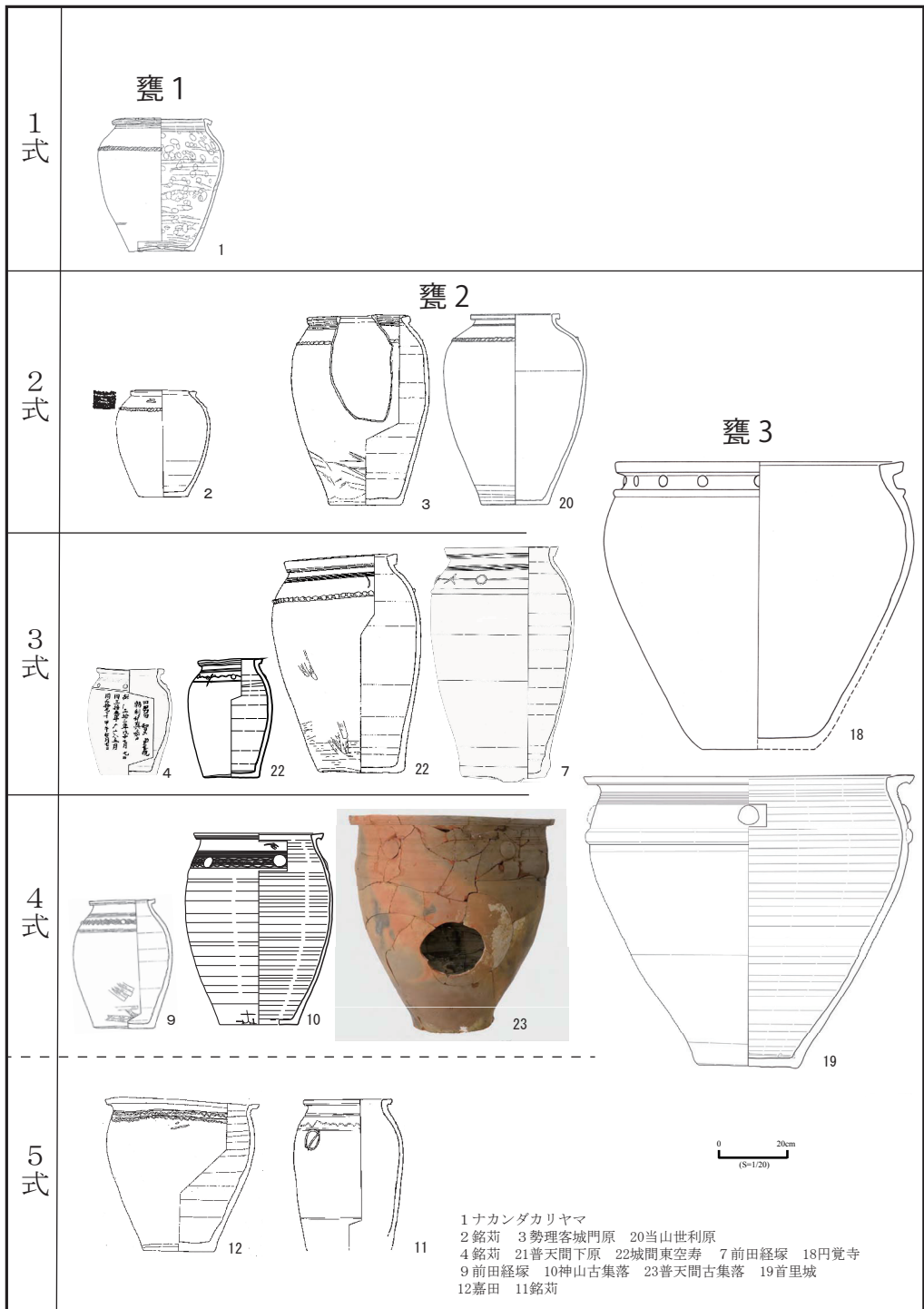


図12 琉球陶器荒焼甕編年表（試案）

子甕のマンガン掛け厨子の変化の方向と整合的なところもあって、これを参考に細分化が可能と考えられる。現時点では、4式について年代比定をできる事例は少ないのだが、4式の出土例には沖縄戦時の壕や基地内遺跡で戦前まであった集落、あるいは戦前の写真に写り込んだ甕に類似することから、3式を王国時代末期までと捉えた。また、5式としたものの一部は八重山諸島の遺跡出土例であることから黒石川などの八重山焼の可能性もある。4式および5式を明治後半から昭和初期と暫定的に比定させておきたい。

琉球陶器研究に関しては、多岐にわたる研究に深化が認められる一方、未だ主要器種の編年観は十分に共有されているものとは言い難い。各地で発掘調査が進むにつれて、明らかにされていくなかで、年代的位置付けや美術史的な評価についても再考が迫られている⁷。本論では詳細な検討は留保した壺と甕の形式分類の曖昧さ、年代比定に関しては幾つかの課題が残ること、製作技法や窯詰めなど技術変化の言及に乏しいなど不十分な考察も多々ある。それでも、琉球陶器の編年研究において、基本的な方法論の提示が行なえたものと考えている。具体的には、①全形を窺える資料を集成する。②属性分析による型式学的検討を行う。③窯跡資料との比較検討。④紀年銘資料による年代比定。⑤厨子甕など既に編年体系がおおよそ把握されている資料と文様や口縁形態、あるいは今回は分析できなかったが陶器製作技法などの横断する属性との相関を把握することが、一つの編年研究の方法論として有効であることを示すことができたと考えている。

本小論は、葬墓制資料から歴史復元を目指す研究に取り組む中で、主に編年研究に有用と考えられる厨子甕以外の製品の銘書資料の紹介することから出発している。編年研究にどこまで寄与できるかは今後も資料を増やして検証する必要があることは言うまでもない。この点、忌憚のないご意見を賜りたい。

本論を執筆にあたり新垣力、阿利よし乃、安和吉則、伊佐慈竜、市川智生、大城直也、大湾ゆかり、新里貴之、鈴木悠、関根達人、高嶺愛奈、渡辺芳郎ほか、資料調査や分析にあたって多くの方から資料提供、ご助言賜りました。記して感謝申し上げます。(五十音順敬称略)

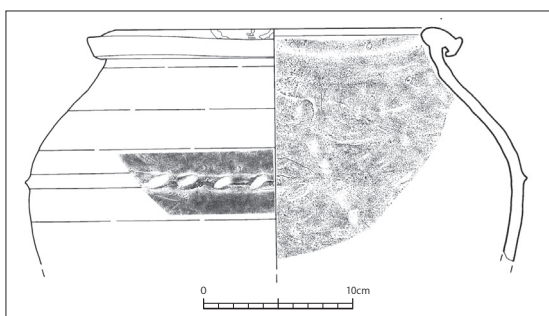
【補記】本研究は「葬墓制資料に基づく近世琉球社会史の学際的研究」(基盤研究B、課題番号21H00604、研究代表：宮城弘樹)の成果の一部である。

◀脚注▶

- 1 沖縄で生産される焼物の呼称については、新垣(2016)に詳しい。本論は近代の沖縄県産の陶器も対象とするが、主として琉球王国時代の陶器について論じることから、「琉球陶器」の呼称で統一する。
- 2 八丈島では本論の壺形をカーミ(甕)と呼称する。伝統的呼称でいう甕と壺の分類は曖昧

なところも多い。なお、本論では相対的に口の広いもので、おおよそ肩部に突帯等の区画文を有するものを甕として扱った。

- 3 報告書には、以下のように紹介する「荒焼（アラヤチ）とも称される無釉焼締陶器のうち、特に高火度で焼成され器面に泥釉などが施釉される一群を指す。これらは湧田古窯跡（沖縄県教委 1993・1999）で生産されたと考えられ、同遺跡および首里城跡木曳門地区（沖縄埋文 2001）や淑順門地区（沖縄埋文 2006）の出土例から 17 世紀頃に位置づけられる。御内原北地区ではシーリ遺構内からまとまって出土しているため、本報告書では「狭義の沖縄産無釉陶器」として別に取り扱う。以下に各器種の分類概念などを記し、個々の詳細は観察表に譲る。」下図参照。



- 4 甕の口縁形態が厨子甕に類似することについては、先行する指摘がある（仲宗根ほか 2022:44）。
- 5 参考URL 那覇市歴史博物館 HP, <http://www.rekishi-archive.city.naha.okinawa.jp/archives/item3/31531>, 2023年10月9日アクセス
- 6 厨子甕からボージャーとマンガン掛け厨子甕の過渡期（18 世紀第 3 四半期）、御殿形厨子も II b 段階で 18 世紀中頃～ 18 世紀末（宮城 2020）とした。古我知焼の操窯年については本論の目的ではないが、資料蓄積もあり絞れるようになってきており別に準備したい。
- 7 倉成多郎は、琉球の窯業史研究について、「従来の陶芸に関する認識が、実証的に確定した事実ではなく、疑う余地が十分にあるということが明白になった（倉成 2011:98）」などと述べている。

《参考文献》

- 安里進 1997『伊祖の入れ御拝領墓の厨子甕と被葬者－近世墓の考古学的調査による家族復元－』
浦添市文化財調査報告書第 25 集
- 安里進・ほか 2006「ボージャー厨子の分類と編年」『比嘉門中の家族史・比嘉門中墓の調査概要』
浦添市教育委員会 pp.4-15
- 安里進・ほか 1987「挿鉢編年からみた近世琉球窯業の展開」『名護博物館紀要 あじまあ』 3

- 名護博物館 pp.79-102
- 新垣力 2011 「無釉陶器の成立と展開」『琉球陶器の来た道』沖縄県立博物館・美術館、那覇市壺屋焼物博物館 pp.119-128
- 新垣力 2016 「〔沖縄産陶器〕の定義・名称・分類に関する一考察」『南島考古』第35号 pp.5-14
- 池田榮史 2018 「沖縄における窯業史研究の到達点と課題 - 窯業開始期を中心に -」『那覇市立壺屋焼物博物館紀要』第19号 那覇市立壺屋焼物博物館 pp.45-54
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2010 『首里城跡－御内原北地区発掘調査報告書（Ⅰ）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第54集
- 小田静夫 2008 『壺屋焼が語る琉球外史』ものが語る歴史16 同成社
- 小田静夫 1996 「東京都汐留遺跡出土の壺屋焼陶器について」『汐留遺跡（第3分冊）－汐留遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書－』汐留地区遺跡調査会
- 家田淳一 2000 「沖縄県の製品の編年」『九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会10周年記念－』九州近世陶磁学会 pp.386-401
- 石垣市教育委員会 1993 『黒石川窯址 沖縄県石垣市黒石川（フーシナー）窯址発掘調査報告書－』石垣市文化財調査報告書第15号
- 上江洲均 1980 「沖縄の厨子甕」『日本民族文化とその周辺歴史・民族篇』新日本教育図書 pp.341-374
- 島弘・仲宗根啓 2004 「壺屋古窯群における「単室登窯」の変遷」『那覇市立壺屋焼物博物館紀要』第5号 那覇市立壺屋焼物博物館紀要 pp.15-24
- 田畑直彦 2017 「近世における壺・甕の製作技術－九州・沖縄を中心に－」『中近世陶磁器の考古学』6 雄山閣 pp.227-263
- 仲宗根求・小原裕也・伊波勝美 2014 「喜名古窯跡（壺編）」『読谷村歴史民俗資料館紀要』第38号 読谷村歴史民俗資料館 pp.7-82
- 仲宗根求・小原裕也・伊波勝美 2022 「喜名古窯跡（鉢編）」『世界遺産座喜味城跡ユンタンザミュージアム紀要』第45号 世界遺産座喜味城跡ユンタンザミュージアム pp.42-124
- 堀内秀樹 2021 「江戸遺跡出土貿易陶磁器の数量分析－需要の検証－」『日本貿易陶磁研究会研究集会』日本貿易陶磁研究会
- 宮城弘樹 2021 『琉球墓制資料集成（2）－銘書編－』（墓制からみた琉球史に関する基礎的研究 成果報告書）沖縄国際大学
- 宮城弘樹 2020a 「御殿形厨子の研究（2）－赤焼・荒焼御殿形厨子の編年－」『南島考古学』第39号 沖縄考古学会 pp.115-126
- 宮城弘樹 2020b 「御殿形厨子の研究（3）－上焼御殿形厨子の編年－」『総合学術研究紀要』第22巻第1号 沖縄国際大学総合学術研究会 pp.23-39

宮里信勇 2008「知花古窯跡とその製品」『沖縄市史』第4巻 自然・地理・考古編-地理・考古編-
 沖縄市役所 pp.138-184

吉田健太 2019「琉球王国における無釉陶器生産と流通」『近世の酒と宴 「近世考古学の提唱」
 50周年記念大会資料集』同大会実行委員会

渡辺芳郎 2018「薩摩焼陶工は琉球にどのような製陶技術を伝えたか?」『那覇市立壺屋焼物博
 物館紀要』第19号 那覇市立壺屋焼物博物館紀要 pp.33-44

渡辺芳郎 2023「喜界島古墓における苗代川製品の分類と編年試案」『喜界島の古墓』（令和3
 年度～7年度科学研究費補助金基盤研究（B）「奄美群島の葬墓制に関する考古学的研究」
 研究成果報告1 代表 関根達人）弘前大学人文社会学部文化財論研究室 pp.231-242

付表 対象資料一覧

本論 No	図 番号	枝 番号	遺跡名	墓/遺構	厨子 No	紀年銘	口径	器高	底径	器種	器形	口縁	肩部 装飾	型式	文献
1	45	192	ナカンダカリヤマ	14号	-	-	29.0	39.0	19.0	甕1	I	a	い	1式	5
2	60	7	銘苅(2)	C-4号	墓室	-	19.0	31.0	14.3	甕1	II	b	い	2式	2
3	20	5	勢埋客	16号	5	-	29.8	55.1	21.7	甕2	II	b	ら	2-3式	15
4	84	3	銘苅(1)	B20号	-	1768	20.0	31.3	18.0	甕1	III	d	ち	3式	1
5	48	7	ナーチュー毛	24号	19	1696	29.7	53.7	22.4	甕2	III	d	の	2式	4
6	123	-	カンジン原	6号	19	1751	35.2	51.6	26.7	甕2	III	d	い	2式	25
7	17	21	前田経塚(3)	B029	11	1887	33.4	69.0	24.6	甕2	III	e	へ	3式	7
8	12	6	前田経塚(9)	1号	8	-	21.1	35.8	16.2	甕2	III	e	ぬ	3-4式	9
9	10	8	前田経塚(5)	1号	2	-	19.4	37.8	18.0	甕1	IV	d	ね	4式	8
10	109	502	神山古集落	SK040	-	-	45.7	67.4	27.4	甕2	IV	f	ぬ	4式	39
11	60	2	銘苅(2)	A12号	覆土	1910	21.0	-	-	甕2	III	f	そ	5式	2
12	24	3	嘉田地区	11号	墓内	-	45.6	44.8	30.0	甕1	V	f	ぬ	5式	36
15	p59	10	古堅大松蒲	-	10	1770	34.0	60.0	23.0	甕2	III	d	ろ	2式	19
16	p60	14	古堅大松蒲	-	14	1842	29.0	57.0	-	甕2	III	e	よ	3式	20
17	44p	9	伊是名玉御殿	西室	9	1870	33.1	57.0	22.8	甕2	II	c	い	2式	24
18	56	15	円覚寺	三門地区南	-	-	82.8	81.6	32.4	甕3	V	f	り	3式	29
19	94	1	首里城奉神門	埋甕	-	-	97.0	84.5	29.0	甕3	V	f	る	4式	35
20	14	39	当山世利原	99-1号	39	-	25.8	56.3	19.3	甕2	II	d	ろ	2式	14
21	117	79	普天間下原	7.8.9号外表採集	-	-	18.8	34.8	16.4	甕1	III	d	な	3式	31
22	25	75	城間東空寿	4号	29	-	32.0	63.5	23.6	甕2	III	e	ろ	2-3式	16
23	図版44	32	普天間古集落	Ⅷ地区SK256埋甕	-	-	77.2	81.3	31.0	甕2	V	f	る	4-5式	38
24	p91	42	伊波焼		42	-	29.0	52.0	-	甕2	III	e	と	5式	22
25			県博		仮694	1789	29.2	67.1	22.1	甕2	II	c	ろ	2式	-
26			県博		仮631	1821 1850	29.4	55.6	22.6	甕2	III	e	へ	3式	-
27	57	1	ヤッチのガマ	1号	6	-	21.8	42.5	19.5	甕1	II	d	ろ	2式	25
28	44p	4	伊是名玉御殿	西室	4	-	29.3	56.2	21.9	甕2	III	e	ち	3式	24
29	83	8	銘苅(1)	B-1~25号	覆土	-	27.0	55.5	19.8	甕2	II	d	ろ	2式	1
30	41	3	ガジャンピラ	4号	墓室	-	27.1	57.9	20.0	甕2	II	c	い	2式	3

付表 対象資料一覧

本論 No	図 番号	枝 番号	遺跡名	墓/遺構	厨子 No	紀年銘	口径	器高	底径	器種	器形	口縁	肩部 裝飾	型式	文献
31	60	6	銘苅(2)	南C-11	-	-	17.2	32.2	15.7	甕1	Ⅲ	d	ろ	2式	2
32	56	5	ヤッチのガマ	6号	4	-	20.7	29.0	16.8	甕1	Ⅱ	b	い	2式	25
33	49	1	ナーチャー毛	40号	2	-	22.9	31.8	14.9	甕1	Ⅱ	b	い	2式	4
34	図版68	2	前田・経塚(那覇)	62号	-	-	22.0	37.0	16.0	甕1	Ⅱ	b	い	2式	6
35	44p	6	伊是名玉御殿	西室	6	-	28.9	48.0	23.5	甕2	Ⅱ	b	い	2式	24
36	図版68	3	前田・経塚(那覇)	63号	-	-	24.5	55.0	21.0	甕2	Ⅲ	d	い	2式	6
37	56	4	ヤッチのガマ	4号	7	-	24.3	20.5	21.0	甕2	Ⅱ	b	い	2式	25
38	p65	30	大門森	C	30	-	19.0	38.0	-	甕1	Ⅲ	d	な	2式	20
39	写真6	1	下ノ新城	1号	1	-	-	-	-	甕2	Ⅲ	d	ろ	2式	13
40	p22	12	ジョーミーチャー	-	12	-	25.5	47.0	18.0	甕1	Ⅳ	f	へ	4式	23
41	54	24	古我地原	根バンタ	24	-	20.6	39.7	16.5	甕1	Ⅳ	d	ね	3-4式	21
42	49	7	前田経塚(3)	C-39	2	-	17.2	36.0	14.0	甕1	Ⅲ	d	な	3式	7
43	p53	48	ジョーミーチャー	-	48	-	26.0	46.0	19.0	甕1	Ⅳ	f	つ	4式	23
44	83	7	銘苅(1)	37号	覆土	-	18.7	30.0	17.3	甕1	Ⅱ	d	は	2式	1
45	62	5	山川原	19号	4	-	19.3	37.8	16.5	甕1	Ⅲ	d	な	3式	18
46	p45	38	ジョーミーチャー	-	38	-	37.5	61.5	24.0	甕2	Ⅲ	e	わ	3式	23
47	91	2	銘苅(1)	不明	墓室	-	32.0	61.7	25.0	甕2	Ⅲ	e	な	3式	1
48	8	6	伊祖入め	-	6	-	28.7	55.9	22.2	甕2	Ⅲ	e	を	3式	12
49	46	1-3	潮原	24号	墓室	-	31.4	22.0	42.4	甕2	Ⅲ	e	ち	3式	27
50	8	1	渡嘉敷後原	1号	-	-	22.3	43.0	20.5	甕1	Ⅳ	d	ね	4式	17
51	17	15	城間	A6号	-	-	22.7	41.8	22.0	甕1	Ⅲ	d	ち	3式	11
52	49	2	ナーチャー毛	39号庭	覆土	-	14.8	26.6	12.0	甕1	Ⅲ	d	ろ	3式	4
53	13	34	当山世利原	99-1号	34	-	23.7	47.4	21.8	甕1	Ⅲ	d	ち	3式	14
54	p55	3	大門森	C	3	-	30.0	60.0	-	甕2	Ⅲ	e	ち	3式	20
55	10	4	古我地原	伊波仲門	-	-	29.9	58.6	21.0	甕2	Ⅲ	e	-	3式	21
56	55	1	前田経塚(9)	35号	1	-	31.4	50.0	22.7	甕2	Ⅲ	e	ち	3式	9
57	62	203	城間東空寿	25号墓庭	-	-	23.3	41.3	19.4	甕2	Ⅲ	d	ろ	2-3式	16
58	49	5	ナーチャー毛	9号	2	-	21.3	39.6	16.1	甕1	Ⅲ	d	ち	3式	4
59	p5	1	名護博	-	-	-	39.0	57.6	24.8	甕2	Ⅳ	d	む	施軸	28
60	49	8	ナーチャー毛	36号	3	-	15.9	32.4	13.0	甕1	Ⅲ	d	た	2-3式	4
61	p5	2	名護博	-	-	-	23.8	51.8	18.0	甕2	Ⅲ	d	む	施軸	145
62	p6	3	名護博	-	-	-	23.6	38.2	20.0	甕1	Ⅲ	d	ら	施軸	145
63	p6	写真5.6	名護博	-	-	-	17.0	34.0	17.0	甕1	Ⅲ	d	う	施軸	145
64	p7	写真7.8	名護博	-	-	-	18.0	33.3	14.3	甕1	Ⅲ	d	ら	施軸	145
65	p7	写真9.10	名護博	-	-	-	19.5	33.5	15.0	甕1	Ⅲ	d	ら	施軸	145
66	32	26	前田経塚(11)	33号	2	-	29.4	53.4	20.2	甕2	Ⅲ	e	か	3式	10
67	34	36	首里城	I地区U-38	-	-	35.6	-	-	甕2	Ⅲ	e	よ	3式	32
68	34	18	真玉道	L-13Ⅱ層	-	-	50.0	69.4	29.2	甕2	Ⅲ	f	め	4式	33
69	71	18	宮国元島	22号	-	-	18.1	34.3	16.3	甕1	Ⅲ	d	ち	3式	34
70	76	30	普天間古集落	区画6SK57	-	-	39.9	64.6	26.6	甕2	Ⅲ	f	め	4式	36
71	40	256	普天間古集落	Ⅲ・Ⅳ地区SK3	-	-	50.4	68.0	27.1	甕2	Ⅳ	f	め	4式	37
72	図版43	21	普天間古集落	Ⅳ地区SK062	-	-	47.4	36.2	21.0	甕1	Ⅳ	f	め	4式	38
73	153	57	中城御殿首里校地区	I層	-	-	41.8	71.0	26.0	甕2	Ⅲ	f	め	4式	30
74	153	57	中城御殿首里校地区	Ⅳ区	-	-	41.8	71.0	26.0	甕2	Ⅲ	f	め	4式	30
75	31	8	宮国元島	15号	墓室	-	19.9	24.9	8.5	甕1	Ⅲ	d	な	3式	34
76	p50		今帰仁村センター	館蔵品	-	-	22.5	34.5	15.0	甕1	Ⅳ	d	れ	施軸	40
77	p51		今帰仁村センター	館蔵品	-	-	28.5	47	22	甕1	Ⅲ	d	ち	施軸	40
78	p58		宜野座博	館蔵品	-	-	14.5	36.0	15.0	甕1	Ⅲ	d	た	施軸	40
79	p59		宜野座博	館蔵品	-	-	33.0	67.5	26.0	甕2	Ⅲ	e	ほ	4式	40
80	p59		宜野座博	館蔵品	-	-	16.5	29.5	14.0	甕1	Ⅲ	d	ろ	2式	40
81	p64		金武町教委	館蔵品	-	-	40.5	60.3	26.0	甕2	Ⅱ	f	め	4式	40
82	p65		金武町教委	館蔵品	-	-	34.0	63.0	26.5	甕2	Ⅲ	e	い	2-3式	40
83	p68		具志川市教委	館蔵品	-	-	30.4	55.0	22.0	甕2	Ⅳ	e	よ	3式	40
84	p72		与那城町歴史館	館蔵品	-	-	45.0	62.0	23.0	甕2	Ⅳ	f	め	4式	40
85	p72		与那城町歴史館	館蔵品	-	-	38.5	67.5	24.0	甕2	Ⅱ	e	よ	3式	40
86	p72		与那城町歴史館	館蔵品	-	-	33.0	61.0	23.0	甕2	Ⅱ	d	い	2式	40
87	p81		読谷村歴史館	館蔵品	-	-	23.0	42.5	19.0	甕1	Ⅱ	d	に	2式	40
88	p81		読谷村歴史館	館蔵品	-	-	22.0	62.0	20.0	甕2	Ⅲ	d	い	2式	40
89	p82		読谷村歴史館	館蔵品	-	-	31.0	51.5	21.0	甕2	Ⅱ	c	い	2式	40
90	p124		東風平歴史館	館蔵品	-	-	37.0	63.0	23.5	甕2	Ⅳ	f	め	4	40
91	p117		沖縄県立博物館	館蔵品	-	-	18.6	32.2	22.0	甕1	Ⅲ	d	ろ	2式	40
92	p125		南風原文化センター	館蔵品	-	-	26.5	47.3	21.0	甕1	Ⅱ	d	い	八重山	40
93	p135		平良市総合博物館	館蔵品	-	-	38.0	78.5	25.0	甕2	Ⅱ	c	い	2式	40
94	p152		喜宝院	館蔵品	-	-	38.0	72.0	25.0	甕2	Ⅲ	d	ほ	2-3式	40
95	p150		喜宝院	館蔵品	-	1849	25.0	40.5	19.5	甕1	Ⅲ	d	ほ	八重山	40
96	p150		喜宝院	館蔵品	-	-	29.0	54.5	21.0	甕2	Ⅲ	d	い	3式	40
97	p151		喜宝院	館蔵品	-	-	30.2	56.5	22.0	甕2	Ⅲ	e	ち	3式	40

《付表文献》

1. 那覇市教育委員会 1998 『銘苺古墓群（Ⅰ）－那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告－』 那覇市文化財調査報告第 39 集
2. 那覇市教育委員会 1999 『銘苺古墓群（Ⅱ）－那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告－』 那覇市文化財調査報告第 40 集
3. 那覇市教育委員会 1997 『ガジャンピラ丘陵遺跡－小禄金城土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告－』 那覇市文化財調査報告第 36 集
4. 那覇市教育委員会 2000 『ナーチャー毛古墓群－那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告Ⅶ－』 那覇市文化財調査報告書第 44 集
5. 沖縄県立埋蔵文化財センター 2005 『ナカダカリヤマの古墓群－急傾斜地崩壊危険区域内擁壁工事に伴う発掘調査報告－』 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 26 集
6. 那覇市教育委員会 2012 『前田・経塚近世墓群（首里大名地区）－那覇市広域都市計画道路事業 3・3・16 号国際センター線に伴う緊急発掘調査報告－』 那覇市文化財調査報告第 90 集
7. 浦添市教育委員会 2012 『前田・経塚近世墓群 3』（前田真知堂 C 丘陵（その 1）- 都市計画街路国際センター線及び沢岬石嶺線工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -）浦添市文化財調査報告書
8. 浦添市教育委員会 2014 『前田・経塚近世墓群 5』（経塚南小島原 A 丘陵 - 浦添南第一土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告書 -）浦添市文化財調査研究報告書
9. 浦添市教育委員会 2017 『前田・経塚近世墓群 9』（経塚下平良大名原 A 丘陵）浦添市文化財調査報告書
10. 浦添市教育委員会 2018 『前田・経塚近世墓群 11』（経塚子の方原 A 丘陵（2）－都市計画街路国際センター線及び沢岬石嶺線工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書）浦添市文化財調査報告書
11. 浦添市教育委員会 1990 『城間古墓群－牧港補給地区開発工事に伴う緊急発掘調査報告書－』 浦添市文化財調査報告書
12. 浦添市教育委員会 1996 『伊祖の入れ御拝領墓－マンション建設に伴う近世墓の発掘調査－』 浦添市文化財調査報告書第 24 集
13. 浦添市教育委員会 2006 『比嘉門中の墓－家族の数だけ歴史がある－比嘉門中墓の調査概要－』 浦添市文化財調査研究報告書
14. 浦添市教育委員会 2008 『当山世利原古墓群 当山宗地原近世墓群 世利原の近世墓－浦添大公園整備事業に伴う発掘調査報告書－』 浦添市文化財調査研究報告書
15. 浦添市教育委員会 2012 『勢理客城門原古墓群－沖縄食糧株式会社敷地内造成工事に伴う発掘調査報告書－』 浦添市文化財調査研究報告書
16. 浦添市教育委員会 『城間東空寿古墓群－県道浦添西原線（港川～城間）道路改築事業に伴う発掘調査報告書－』 浦添市文化財調査報告書

- う埋蔵文化財発掘調査報告書ー』浦添市文化財調査研究報告書
17. 豊見城村教育委員会 1997『渡嘉敷後原遺跡群ー老人保健施設(とよみ健康長寿の杜)建設
工事に伴う緊急発掘調査報告ー』豊見城文化財調査報告書第5集
 18. 北谷町教育委員会 2001『山川原古墓群(2)ー瑞慶覧(11)倉庫建設に係る文化財発掘調
査報告ー』北谷町文化財調査報告書第20集
 19. 名嘉真宜勝・泉川良彦 1989「読谷村字古堅大松蒲墓調査報告」『読谷村立歴史民俗資料館
紀要』第13号 読谷村立歴史民俗資料館 pp.43-90
 20. 具志川市教育委員会 1993『大門森古墓群(銘苅門中墓)調査概報』具志川市の文化財 第3集
 21. 沖縄県教育委員会 1987『石川市古我地原内古墓ー沖縄自動車道(石川から那覇間)建設
工事に伴う緊急発掘調査報告書(7)ー』沖縄県文化財調査報告書第85集
 22. 名嘉真宜勝 1992「石川市伊波焼墓調査報告」『読谷村立歴史民俗資料館紀要』第16号
読谷村立歴史民俗資料館 pp.61-116
 23. 具志川市教育委員会 2003『ジョー(門)ミーチャー墓調査概報』具志川市の文化財第5集
 24. 首里城研究会(編) 2006『首里城研究』第9号首里城公園友の会
 25. 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001『ヤッチのガマ カンジン原古墓群ー県営かんがい排
水事業(カンジン地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ー』沖縄県立埋蔵文化財センター
調査報告書第6集
 26. 沖縄県立埋蔵文化財センター 2002『嘉田地区古墓群ー嘉田地区ほ場整備事業に伴う緊急
発掘調査報告書ー』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第21集
 27. 沖縄県立埋蔵文化財センター 2007『与那国島潮原古墓群ー与那国空港拡張工事に伴う緊
急調査報告ー』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第43集
 28. 名護博物館 1996『沖縄の古窯古我知焼』
 29. 沖縄県立埋蔵文化財センター 2002_『円覚寺跡』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第10集
 30. 沖縄県立埋蔵文化財センター 2021『中城御殿跡首里高校内・櫛園跡』沖縄県立埋蔵文化
財センター調査報告書第110集
 31. 沖縄県立埋蔵文化財センター 2022『普天間石川原第一遺跡普天間グスクニー遺跡普天
間下原古墓群』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第111集
 32. 沖縄県立埋蔵文化財センター 2004『首里城跡』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第19集
 33. 沖縄県立埋蔵文化財センター 2006『真珠道跡』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第32集
 34. 沖縄県立埋蔵文化財センター 2013『宮国元島上方古墓群』沖縄県立埋蔵文化財センター
調査報告書第66集
 35. 沖縄県立埋蔵文化財センター 2013『首里城跡』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第68集
 36. 沖縄県立埋蔵文化財センター 2015『キャンプ瑞慶覧内病院地区に係る文化財発掘調査報

- 告書 1』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 74 集
37. 沖縄県立埋蔵文化財センター 2015『キャンプ瑞慶覧内病院地区に係る文化財発掘調査報告書 2』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 79 集
38. 沖縄県立埋蔵文化財センター 2016『キャンプ瑞慶覧内病院地区に係る文化財発掘調査報告書 3』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 83 集
39. 沖縄県立埋蔵文化財センター 2019『神山古集落』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 99 集
40. 沖縄県教育委員会 2003『沖縄の陶器類関係資料調査報告書』沖縄県文化財調査報告書第 142 集